



むげんだい 夢限大

平成28年2月16日(火) vol.38

時空を超えた、感動の恩返し！

昨年末から上映されている映画「海難1890」をご存じでしょうか？3年生は歴史の教科書に出てきたので覚えていると思います？！海難事故に遭ったトルコ軍艦エルトゥールル号を日本人が救援し、その後日本とトルコの長年にわたる友好関係をテーマにしたドラマです。



1890年、オスマン帝国（現在のトルコ）の船、エルトゥールル号が、台風による強風にあおられ、和歌山県紀伊半島沖で岩礁に激突、沈没するという大惨事が起こりました。乗組員のほとんどが海に放り出され、587名の方が死亡しました。しかし、中には一命を取りとめた乗組員もいて、命からがら、灯台のある崖を登ったんです。灯台守は驚きます。明治23年の田舎ですから、外国人なんて見たことがありません。当時50軒くらいしかない大島村の人たちが、総出となって救助に向かいます。そして、まだ命があった69名の人たちを救出し、自分の服を脱いでその人たちを抱きしめ、自らの体温で温めてあげたのです。さらには、衣服や食料を与え看病をしたのです。翌日には、日本政府を挙げての救助が始まり、遺体を引き上げては丁寧に埋葬しました。そして最後には、生き残った69人の乗組員を「金剛」と「比叡」という2隻の軍艦でトルコに送り届け、日本中から集まったたくさんの義援金を渡したそうです。

当時の暮らしは、とても貧しかったと思います。でも、みんな、**思いやりの心を持っていて、困っている人がいれば助けてあげる…**、それが当たり前だったんです。

時は過ぎて約1世紀たった1985年、イラン・イラク戦争が起こります。この時、イラクのフセイン大統領がとんでもないことを言い出します。「今から48時間後にイラン上空を飛ぶ全ての飛行機を撃ち落とす」と。リミットが迫る中、日本人215名がまだイランに残されていました。しかし、日本政府は出遅れてしまい、民間の航空会社も飛べない状況に陥っていました。そんな中、タイムリミットの1時間15分前に、2機の飛行機が空港に降り立ちます。その飛行機こそ、トルコの民間機だったのです。その時のことを元駐日トルコ大使が、次のように語っています。「95年前のエルトゥールル号の事故に際し、大島の人たちや日本人がして下さった献身的な救助活動を、今もトルコの人たちは忘れていません。トルコでは子どもたちでさえ、エルトゥールル号のことを知っています。それを知らないのは、日本人だけです」

トルコ国内の世論調査では、日本が常に「好きな国」のトップにランキングされているそうです。トルコの人たちは、自分たちの先祖が受けた恩を忘れていなかったんですね。**与える心は、与える心と呼ぶ**んです。時を超えて、つながっていくんですね。

情けは人のためならず！

このことわざの意味って知っていますか？国民の約半数が、間違っているとらえているようです。「人に親切にすることは、甘やかすことになり、その人のためにならない」というふうに思っている人が…。

エッ？と思った人は、この後に続く言葉を知れば、本当の意味が分かります。

「情けは人のためならず、めぐりめぐっておのがため（自分のため）」

つまり、「人に親切にしておく」と、それはめぐりめぐって、いつか自分にとって良いこととなって返ってくるから、人には親切にしましょう」ということなんです。当然のことですね。親切にしてくれた人を、人は放っておきません！いつか必ず恩を返そうと思うでしょう。人の幸せを願う人は、自分の幸せも多くのの人に願ってもらえるのです。まわりに感謝される人生って素敵ですよ。（*~*）

問題の本質を見極める！

★キラキラ輝く中学生★

何か問題が生じたとき、人はどうしてもその場しのぎの対処をしてしまいます。しかし、本当にその解決方法で、ものごとは良くなるのでしょうか？起こっている問題の本質そのものを理解せずに解決しようとすると、結果的には、より一層の混乱と、たくさんの時間や資源の浪費につながってしまいます。

そんなことを考えさせられるエピソードを紹介したいと思います。裏面の「王様とネズミ」というお話を読んで見て下さい。きっとこれからの問題解決のヒントになると思います。

先週、1年生では「進路セミナー」が開催されました。2、3年生も1年生のときに経験したと思います。今回は、10人の講師の方々を招き、働くことのやりがいや大変さ等、現場の声を聞くことができました。中には体験活動を取り入れた講座もあり、感想を読んでも、とても楽しかったとか、勉強になった、働くことってたいへんといった声が多く、想像していた以上に苦労があることにも気づけたようです。2年生では、職場体験学習があります。少しずつ、将来のことについても考えていきましょう！



王様とネズミ

ある日のこと。王様がコックに命じました。「これまでで最もおいしい世界のデザートを作ってくれ」

命じられたコックは、うなづいてキッチンへと戻りました。王様からこうしたことを命じられるのは珍しいことではありませんでした。「今までで一番おいしいデザートを食べたい」と毎晩毎晩、王様は言うのです。コックは、毎晩繰り返されるこのやりとりがだんだん嫌になってきました。なぜなら、どんなデザートを作っても王様は満足しないのです。次の日もまた次の日も「今までで一番おいしいデザートを」と言い続けました。

ある日、コックは王様に一泡吹かせてやろうと考えました。夕食後、これまでで最もおいしい世界のデザートが王様の前へと運ばれました。このデザートのおいしそうな香りは宮殿はおろか、森全体まで広がっていきました。誰もが我慢できなくなるほど、それはそれは良い香りでした。王様はそのデザートを、ガツガツとむさぼるように食べ始めた時、宮殿中のネズミも我慢できず、王様のダイニングルームに集まってきました。ネズミは、いたるところにいました。ダイニングテーブルの上も、ネズミで埋まり始めていました。デザートを求めてカーテンをはい回り、小さなネズミは、デザートのはずかなくかけらでも残ってないかと王様のひげの中まで潜り込むほどでした。これは宮殿の一大事でした。部屋のカーペットの上も、カーテンの裏もネズミでいっぱいなのに、まだ次から次へと、そのデザートを求めてネズミが部屋に集まってきました。

この大惨事をどう解決すればいいのか緊急の会議が招集されました。ゴホンと、ひとつせきばらいをした王様が言いました。「何か対策はあるか？私たちの宮殿は、ネズミによって侵略されてしまった。何か解決策を持っている者は、その策を口にせよ」大臣たちは互いに話し合った末、「殿下、ネズミを退治するために猫を集めるべきだ」という結論に至りました」と答えました。この解決策は確かに合理的な気がしました。そこで将軍が呼びつけられ、王国中の猫を集めて宮殿へと連れてくるよう、命じられました。すぐに猫たちが連れてこられました。するとあっという間にネズミはいなくなりましたが、今度は宮殿が猫だらけになってしまいました。あちらもこちらも、見渡すかぎり猫だらけです。猫たちは、何でもかんでもひっかいてまわり宮殿の高価な家具の上にゆったりと横になり大切なカーテンで爪を研いでいます。あたり一面、ニャーニャー、ゴロゴロという猫の音が響き渡っていました。

そこで、再び会議が招集されました。王様は「誰か、何かほかに妙案はないか？」と口火を切りました。前同様、大臣たちは大声で議論を始めました。しばらくして彼らは言いました。「殿下、今度は猫が嫌う犬を連れてきてはいかがですか」それを聞いた王様は、再び将軍を呼び、王国中の犬を集めて即座に宮殿へと連れてくるように命じました。すると、すぐに猫は犬に取って代わられました。しかし、そうしたところで、犬は犬で自分のやり方を持ちこんでくるだけのこと。宮殿はあっという間に、あちこち犬がうろつき吠える声でいっぱいになりました。今度は宮殿が犬だらけです。

またまた宮中会議が招集され、今度は犬は虎が苦手だから虎を集めて宮殿に連れてくることになりました。すると、すぐに犬はいなくなり、宮殿は虎だらけになりました。これにより宮殿は深刻な事態となりました。虎たちは凶暴で、いつ自分たちを襲ってくるかもしれないと誰もが虎を恐れて、身動きひとつできなくなったのです。

そのため次の会議の招集は大変な困難をともしましたが、やがて、虎が怖がる象を集めてすぐに連れてくることになりました。象が到着し始めると虎はあっという間に宮殿から姿を消しましたが、後にはより大きな混乱が待っていました。今や宮殿は象だらけ。動く隙間もないほどです。象はさまざまなものを壊すため大変な騒ぎになってしまいました。そして、あっという間に、宮殿は象のふんでいっぱいになりました。

そこで、またまた会議が招集され、今度は宮殿にネズミが集められることになりました。象は、ネズミを恐れるからです。将軍は命令に従い、ネズミを集めました。ネズミが集まり始めると、象は宮殿を去って行きました。そして宮殿は再び、初めの状況へと戻ったのです。

このころになり、ようやく王様は、これらの大失敗はすべて自らの責任であると気がつきました。自分の強欲さえなければ、このような事態は起こりえなかったと深く深く反省したのです。

Pot with the Hole (穴の空いた桶) よりノブ・ラワット